

土木遺産を活用した地域づくりと地域教育の取組み

羽野 暁 第一工業大学工学部自然環境工学科

世界遺産を活かした地域づくり、まちづくりが各地で進められている。観光資源としての利活用だけでなく、歴史教育を通じた郷土の誇りや愛着の醸成等、世界遺産の利活用には様々な効果が認められている。規模は小さいが、地域に残る土木遺産の利活用により、地域において同様の効果が期待できると筆者は考えている。現在、第一工業大学では地域の土木遺産の発掘、価値評価、市民ワークショップへの展開を通して、土木遺産を活かした地域づくりと地域遺産教育に取り組んでいる。

鹿児島県始良市の「山田橋」は、農村地域にひっそりと残る昭和初期の鉄筋コンクリート橋である。大学では山田橋のような地域の土木遺産を対象として、学生が主体となり住民へのヒアリング調査を実施し、施設を中心とした地域の生活風景に関する歴史情報を収集している。得られた情報をもとに、子供に分かりやすく地域の歴史を紹介する紙芝居を制作し、地域の小学校において実演会を開催している。歴史紙芝居の実演会には地域の子供と高齢者が参加し、世代を越えて地域の記憶を共有する貴重な世代間交流の場として好評であり、地域コミュニティの活性化が期待

できる。鹿児島県霧島市に残る農業用水施設である「平熊の石洗越」は、霧島市の指定文化財であり、石洗越の周辺には美しい農村風景が広がっている。大学では石洗越を中心とした平熊地区を対象として、授業の一環でまちあるきマップづくりを実施している。マップの制作を通して学生と地域住民が触れ合うことで、ともに地域の魅力に気づき、地域への愛着が醸成されている。土木遺産を対象とした地域と学生の協働の取組みはまだ緒に就いたばかりだが、魅力ある地域づくりにつながることを期待される。

小学校での山田橋の歴史紙芝居実演会



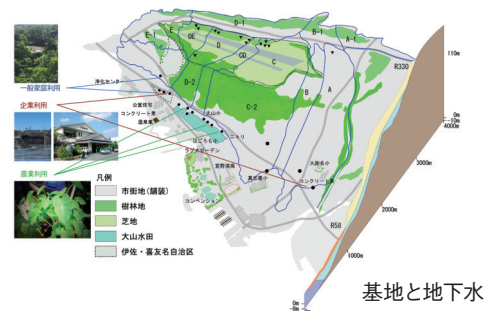
平熊のまちあるきマップ発表会

沖縄県基地跡地利用 — 普天間飛行場跡地利用における地下水の保全と大学

小野 尋子 琉球大学 工学部

沖縄県宜野湾市には、既成市街地に囲まれた市の中央部に市域の約4分の1にあたる約480haの普天間飛行場が立地している。今後、返還が予定されており、地主会、県・市、市民、コンサルタント、学識経験者らが、それぞれの見識を持ち寄りながら丁寧な計画検討が進められている。

筆者は、平成22年度から6年程、普天間飛行場跡地利用の計画づくりに関与させて頂いている。これまで大きな方針として1) 少なくとも約100ha以上の大規模な公園等の施設緑地の整備による市街地の魅力増進、2) 中部縦貫道路及び宜野湾横断道路の整備、3) 普天間飛行場内に残存する自然や歴史文化遺産の保全と活用、4) 雨水を浸透する琉球石灰岩台地上の開発であることから地下水脈を保全する土地利用の実現等が打ち出されている。平成27年度、著者の研究室では、実測データを用いて普天間飛行場を含む流域での水収支モデルを推定し、あわせて特産品である田芋水田農家や地域企業の現状の地下水利用実態から将来需要推計を行った。そして、水収支モデルから導出された開発後の地下水の水量が、将来需要量に逼迫



する懸念がある事、しかし、その一方で地下水枯渇を回避できる土地利用計画の可能性もある事等を整理し、関係者らと勉強会を重ねてきた。平成28年2月の地域報告会では、地主会、市民組織に加えて、田芋生産組合や関連企業にも参加いただいて、今後の普天間飛行場跡地利用について、研究室での推計結果を元に熱心な議論が行われた。行政にもご協力いただいた。基地により分断されていた市街地を「水」がつなぐ形で、基地の内側と外側の関係者が、協調的な関係の中で、都市の将来像を共に語り、地下水保全の課題と可能性を認識できた事の意義は大きい。地主・市民・行政・専門家の協働による跡地利用の計画づくりを今後とも応援したい。